

奨進医会——『医談』から『刀圭新報』へ

岡田 靖雄

精神科医療史研究会

受付：平成19年10月22日／受理：平成19年11月2日

1. はじめに

わたしが『日本医史学会総会百回記念誌』のための「日本医史学会の歩み」の執筆にとりかかったとき、3つあるいは4つの謎があった。第1は、日本医史学会の前身奨進医会で、その機関誌『医談』の発行が不規則になってついに発行中止となり、ついで『刀圭新報』が発行されるまでの会の活動はどうだったか、である。第2は、『刀圭新報』時代における暉峻義等の関与である。第3は、奨進医会時代からの伝統をうけつぐ医家先哲追薦祭が戦争中および戦後間もない頃に、いつといつにおこなわれたか。第4は、第3にからむが、日本医史学会総会の回数の数え方は正しいのか、である。

第2の問題は、山崎佐編「医家先哲追薦会四十五年日本医師協会創立二十年記念特輯」（『日本医師協会雑誌』第13巻、1936-37）により解決され、その点は「日本医史学会の歩み」にかき、また「暉峻義等と医学史研究——奨進医会および日本医史学会とのかかわりを中軸に——」（『日本医史学雑誌』第46巻第1号、2000）にもした。第3、第4の点は、1945年の医家先哲追薦会の記載は不確実で、また総会回数の数え方がずさんであることがわかった（したがって、いま慣行されている回数の数え方は、真正なものからずれている）。これらの点も、「日本医史学会の歩み」に記載した。

しかし、この執筆の時点までには、『医談』から『刀圭新報』への移行期については、資料をみいだせなかった。

今回古書店から入手した『自明治三十九年一月総 会費収納簿 奨進医会』は、この空白期に相

当するもので、これによって当時の奨進医会（あとは単に“会”とする）の活動を推測し、また当時の会員がどんな人であったか、できるだけさぐってみたい。

この『会費収納簿』は、半面10行の和野紙を二つ折りにし、その46丁をとじた縦23.6cm、横16.7cmの小冊子に厚紙の表紙をつけたもので、その表紙は図1のようである。記載は2丁目からはじまる。その最初の部分を図2にあげた。1905年（明治38年）12月の4名の納入分は1906年（明治39年）度のものである。1909年2月まで記入されたところで筆がかわる。未記入の1丁において、同5月から別筆で記入がはじまって、11月にいたる。1909年11月29日から集金人扱いとなっ

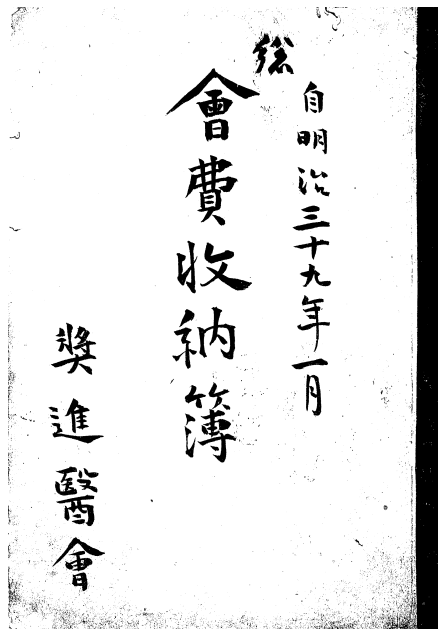


図1

一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
小池 義三	田中 増三	宮永 宗而	宮戸 俊次	種方 良一	上杉 謙三	富士川 游	藤根 常吉	福井 信敏	呉 秀三
						ク	ク	ク	明治廿九年

図2

て、筆もかわって1910年2月にいたる。あとは数人の筆による記入で、1910年7月11日までにいたっている。

1909年2月まではところどころに、合計と各月の出金とが記入されている。出金は当然、会のならかの活動をしめすものである。

また、1年間に同一人が2回会費を納入しているばあいがある。その一部分は分割納入とみられるが、重複する多くは会費前納と推察された。そこで、その年の会員数をかぞえるには、適当に前納を推定しておこなった。

2. 既知の奨進医会の活動状況

「日本医史学会の歩み」¹⁾にもしるしたことであるが、『医談』後半期を中心に、奨進医会の活動の概略をみておこう。

広島で1899年に富士川雪(游の父)によりはじめられた奨進医会は、1889年に富士川游を中心とする私立奨進医会として再組織された。その事務所ははじめ広島県におかれていたが、1890年に東京にうつされた。1892年3月4日(明和8

年3月4日の観臓の挙を記念して3月4日がえらばれた)に、私立奨進医会は先哲祭をおこない、翌年3月4日にはその名は医家先哲追薦会とあらためられた。これは戦後までつづく私立奨進医会(1901年からは“私立”をとって、“奨進医会”)の中核的行事であった。そのまゝに機関誌『私立奨進医会雑誌』があったが、1893年6月に機関誌『医談』が創刊された。そこで、医家先哲追薦会の挙行(年1回、3月4日)、毎月の常会、毎月の『医談』発行(富士川游の留学中は年4回の発行)が、会の主要事業であった。1894年12月には、東京帝国大学医科大学教授の田口和美(解剖学講座担任)が会長にえらばれた。田口は、医家先哲追薦会で何回か演説し『医談』にも多くの論文をよせていて、お飾りではない活動的な会長であった。

1895年12月発行の『医談』第30号にのった会友録による会員数は163名である。そのまゝ1894年8月発行第15号にのる藤根常吉「或問一ツ」には、会友は500をこしていたが、雑誌1冊10銭は法外にたかいからと、会費の払いがわるくて淘汰されていまは会友は300にみたない、とある。1897年12月発行第49号にのっている会友録では、会員は212名で、1895年に比してとくに東京で会員数がふえている。ここには「特別会員録」がつけられていて、東京在住の医界の長老および東京帝国大学医科大学教授の多くの33名が名をつらねている。会の規則には「斯道ニ縁故アル者宿及ヒ先輩医家ヲ推薦シテ「特別会員」トス「特別会員」ハ本会ノ賓客トシテ礼遇ス」とある。ところが、この特別会員のうちで、のちにも会員として名をだすのは、三宅秀、石黒忠恵、田口和美、片山國嘉だけである。つまり、特別会員とは、会の賓客として『医談』を贈呈していた人たちだったろう。

ところが、1904年2月に田口会長が死去した。つづいて5月の役員会で呉秀三が、会長欠員中の監事長(規則に監事長の職はない、監事〔今の理事相当〕8名の代表の意だろう)に推挙されたが、翌年には監事長の名称はきえている。会の代表は、1909年10月に片山が委員長として挨拶するまで、不在のままであった。

医家先哲追薦会は1904年から1909年まで3月

4日に、第13回から第18回までがおこなわれた。1910年の第19回は、3月30日に京都でおこなわれた。これは、第3回日本医学会が4月1日から大阪で開催されるのにあわせたものであろう。そのほかに会がおこなった重要行事としては、1906年4月4-7日と第2回日本聯合医学会会期中の展示、1907年12月会と若越医会との共発起での杉田玄白先生贈位（正4位）祝賀会、1909年および1910年の10月におこなった蘭化講演会があった。

『医談』は1号10銭、郵送料5厘であった。その発行状況は、1903年11号、1904年9号とほぼ順調であった。第97号から発行年月日をするすと、第97号—1904年12月30日、第98号—1905年1月30日、第99号—1906年2月10日、第100号—1907年8月31日、第101号—同9月30日、第102号—同10月30日、第103号—同11月30日、第104号—同12月30日、第105号—1908年1月30日、第106号—同2月29日、第107・108号—同4月30日、第109号—同5月31日、第110号—同6月30日、第111号—同7月30日、第112号—同8月30日、第113号—同9月30日、第114・115号—同11月30日。この第114・115号のあととはでていない。

1907年10月30日発行第102号の最終ページにはつぎの広告がのった、——

地方会員に告ぐ

久しく休刊いたし居候「医談」の儀夫々準備を整ひ第百号より続刊候へども常に経費不足勝の為め有志諸君の寄附と東京市会員諸君の会費とを以て漸く其費用を充たし居候次第につき地方会員諸君に於ても右御諒察の上本年下半年期よりの分として御送金被成下度奉願上候以上

奨進医会

そして、1908年1月30日発行第105号からはつづけて、最終ページにつぎの広告がのった、——

緊急広告

本会会費は些少の金額にて御送致上御手数の際察上候へとも当事者としてはイツモ〜囊底の空乏に閉口致居候間事情御推諒の上何卒至急御送金相願候

奨進医会

富士川は1900年9月にドイツ留学から帰国し、主著『日本医学史』は1904年10月に出版されている。『医談』危機にさいし富士川はなにをしていたのか、すこしく不思議である。

1909年（明治42年）8月に創刊された『刀圭新報』は、毎月定期的に発行されていた。1号20銭で、郵送料は1銭であった。

3. 『会費収納簿』からわかったこと

まず、『会費収納簿』に会費をおさめたとしてされている名をかぞえると、1906年は会費1円で会員数は66名である。前年、この年とも『医談』はそれぞれ1号しかでていないし、会費納入者がへっているのも当然である。翌1907年には『医談』は5号でていて、会費納入者は80名である。会費は年の途中で1円から75銭に値下げされたらしい。1908年には『医談』は11号（9冊）発行されて、1円50銭の会費納入者は133名。1909年には、8月創刊の『刀圭新報』が月1回、5号だされ、会費1円50銭をおさめた普通会員が201名、会費2円をおさめた正会員は22名とふえて

いる。『会費収納簿』には会費のほかに、何人かからの寄付金、追薦会残金、杉田先生祭典残金が記入されている。

また、ほぼ毎月の計が記入されるとともに、20円、30円といった月づきの出金が記入されている。ごく少額のばあいをのぞいて、出金のあった月は1906年1-2月、8月、9月、11月、12月、1907年の各月、1908年の各月、1909年の1月、2月であった（同一筆による記入はここでおわっている）。出金が少額であった1906年3-7月の会の活動は活発でなかったことが推察される。

ところで、たとえば16円49銭5厘（1908年6月、——『医談』165冊相当、東京の白米小売価格でほぼ9斗相当）といった月づきの出金は何のためだったろうか。『医談』発行の年月と照合すれば、これはあきらかに『医談』発行の直接費用ではない。毎月の常会の費用にしてはおおすぎるし、東京でひらかれる常会の費用は出席者が適当に負担していたとかがえるべきだろう。また、常会に出席できない地域にすんでいる会員にとっ

ては、『医談』を手にすることが会員である証であったろう。また、残金が50円をこえることはめったにない。

上記から推測されるのは、会費がある程度たまると、それを『医談』発行費用にべつにつみだてていた、ということである。この積み立て分に毎月の事務経費、あるいは事務取り扱い者への謝礼を合計したものが、各月の出金としてしるされたのだろう。

1909年2月の締めにつづいて、“差引残金参拾参円参拾九銭 右金員齋藤清之丞君遺族へ従来ノ慰勞トシテ贈リタリ”としるされている。齋藤の名は1897年名簿になく、この『会費収納簿』の会費納入者名にもない。すると、この人は会員ではなくて、会の事務担当者であったと推定される。

1907年2月まで記入していたのは齋藤の筆であったろうし、かれの死は1909年3月または4月であったろう。1908年11月30日発行の第114・115号をもって『医談』はおわっている。この点をつなげると、かれは『医談』の編集事務にもあずかっていたのではあるまいか。まったく断りなしの『医談』終刊は、齋藤の発病のためであったろう。

『会費収納簿』の記入は1909年5月7日から再開されているが、5月中の会費納入は3名だけで、あとは8月末に“21銭切手見本”という記載が22件つづく。それとともに会費納入もふえてくる。あたらしい機関誌『刀圭新報』は同年8月10日に創刊され、あとは毎月定期的に発行された(1号1冊20銭、郵送料1銭)。上記の“見本”という記載は、購買者をふやそうとかなりの宣伝攻勢をしたことの現われであろう。ただし、この見本誌を購入して会員になった人は、1,2名にとどまったようである。

『医談』には図書の広告がすこしあったが、その広告料は『会費収納簿』には記入されていない。『刀圭新報』では数枚の赤紙がとじこまれていて、それが広告欄であった。1909年9月からは広告料が『会費収納簿』に記入されていて、広告料はだいたい1ページ3円であった。裏表紙の広告料はわからない(相当分の記入がない)。

1909年11月からは会費集金は集金人によって

おこなわれた。集金手数料は5分であった。

1909年5月からは出金の記載はない。そして、この『会費収納簿』への記入は、1910年7月をもっておわっている。

いずれにせよ、主として『会費収納簿』の記載から会の活動につきしりえたことはおおくなかった。そこで、ここに名のでた会員につきできるだけしらべてみるようにした(わたしになじみの名前がすくなくなかったこともこともあって)。

4. 当時の会員

「日本医史学会の歩み」にわたしは、“奨進医会の会員がどういう階層の人であったか、こまかい分析はしていない。藤根常吉(またのちの山崎佐)のような非医師もいたが、これは例外であろう。長老、医育機関の関係者、先進的な良心的な開業医が主であった。それに医療ジャーナリストが比較のおおい。また精神科の関係者も目につく。”²⁾とかいた。この1906-09年名簿ののっている人数はおおくない。また会員数からみて奨進医会が苦境にあったときの会員であるから、中核的な会員が比較のおおいだろう。

1909年当時の会則はわからないが、1901年の規則では、会員会費は年1円、正会員会費は年2円となっていた。この収納録では1906-08年は、会費年額は同一である。1909年の会費では、1円50銭の人と2円の人とがある。1909年の締めでは、金216円普通会員144人、金24円正会員12人とある。ところが、2円の会費をおさめている人をかぞえると22人いた。このなかには、翌年分の一部前納、寄付付加の人もいたかもしれないが、2円納入者を1909年正会員とみておく。

そして、この4年間の会費納入者名簿から、1909年正会員、3回以上名のでる人、その他目についた人をえらんだ。それぞれがどういう人か、岡田「日本医史学会の歩み」、『東京帝国大学医科大学並同医学部卒業生氏名録』(氏名録出版部・東京、1920年)、工藤鐵男編『日本東京医事通覧』(日本医事通覧発行所・東京、1901年)、工藤鐵男編『日本杏林要覧』(日本杏林社・東京、1909年)、『日本医籍録』(第2版、医事時論社・東京、1925年)によってさぐってみた。なお、会費収納簿に住所

が記入されているのは例外的であった。そこで『医談』第49号（1897年）所載会友録および『刀圭新報』第4巻第1号（1912年）所載会員名簿によって、会員の住所をさぐった。医籍録などに氏名索引はついていないので、さがしそこねた会員はすくなくない。

各人についての記載はつぎのようにする。——
 医育機関卒業または医師免許取得の年（1897年であれば97と略記）、卒業した医育機関（東京帝国大学医科大学本科は“東医”と、同別課は“別課”と略記、その他は常識的に判断できる省略法で）または医師免許取得の形態、専門科、主要職歴（1906-09年よりあとの職のばあいもある）、その他特記事項。

I. 1909年正会員（右肩にレを付したのは、次項に名のでない人）

池谷榮次郎^レ（80別課，内科），岩井禎三^レ（80別課，内科），大澤岳太郎（87東医，解剖，東医教授），岡田幹児（83別課，外科），岡田和一郎（89東医，耳鼻科，東医教授），岡村龍彦（95東医，皮膚科），木下正中（84東医，産婦人科，東医教授），久保猪之吉（00東医，耳鼻科，九大教授），呉秀三（90東医，精神科，東医教授），小池義三（87別課，内科，元巢鴨病院医員），高田耕安（89東医，内科—結核，南湖院），遠山椿吉（89別課，東京顕微鏡院長），土肥慶藏（90東医，皮膚科，東医教授），永井潜（02東医，生理学，東医教授），富士川游（87広島，内科，中洲養生院），藤浪鑑^レ（95東医，病理学，京大教授），藤浪剛一（06岡山，放射線，慶應教授），藤根常吉（済生卒前期試験合格，医事新聞社長，第43回医家先哲追薦会で追薦会全出席で表彰），緑川興功（従来，84免許，会役員しばしば，観臓記念碑写真にでる），宮本仲^{はじめ}（81別課，内科，小児科先達の一人），宮本叔^レ（93東医，内科，東医助教授，駒込病院長），三輪信太郎^レ（94東医，小児科，東医助教授，延寿堂病院長）

II. 3回以上名のでている人（右肩に○は4回，右肩に*は上掲）

秋月晃藏[○]（85別課），吾妻傳（87試験），尼子四郎[○]（87広島，元巢鴨病院医員，『医学中央雑誌』

創刊，「猫」甘木先生モデル），荒木盛英，石岡繁太郎[○]，石黒宇宙治[○]（79東医，内科），鶴飼二郎（96試験），内田慎太郎[○]（95東医，小児科），宇津木忠三郎（90得業士），大澤岳太郎*，大西直三郎，岡崎桂一郎（金沢，発行者・編集人ほか会役員，脚気と米食），岡崎遠光，岡田乾児^{○*}，岡田和一郎^{○*}，岡村龍彦^{○*}，小原義之，片桐重昭[○]，（84従来開業），菅野弘一，木下正中^{○*}，木庭昇，桐淵道齋[○]（84従来開業），久木田七郎（96試験），栗田昇[○]，呉秀三^{○*}，黒川敏二，小池義三^{○*}，河内全中（第1高等，東医小児科，小児科），^{こうの}向野鶴吉[○]（86別課，内科），後藤省吾（91第2高等，精神科，元巢鴨病院医員，東京脳病院），小林三郎[○]（84医学校），齋藤英三郎[○]，齋藤紀一（86山形，精神科，青山脳病院，齋藤茂吉義父），佐藤信郎[○]（93試験），佐野吉作[○]（95試験，ドイツ留学ドクトル，内科），鈴木篤三郎（94福島），高田耕安*，高野熊男，高橋金一郎（90東医，外科，岡山教授，ドイツ語），高比良養次郎（86長崎，役員しばしば，第43回医家先哲追薦会で全出席表彰），田中増藏[○]，種市良一（88試験，青森県），塚原寅次郎[○]（90試験），遠山郁三（02東医，皮膚科，東北→東医教授），遠山椿吉^{○*}，土肥慶藏^{○*}，永井潜*，中泉行徳（96東医，眼科，東医助教授），長竹正徳[○]，二神寛治[○]，波多野俊太郎[○]（89試験），林止（90第2高等，内科），八田宏吉[○]（85別課，内科），平山金次郎（89別課），福井信敏[○]（85別課，小児科，役員しばしば），富士川游^{○*}，藤根常吉^{○*}，丸東（80別課），緑川興功^{○*}，宮永學而（第1高等，法医学，東医講師），三輪信太郎^{○*}，村木達郎[○]（95得業士），安田義幹，山口秀吉，山本安三郎（90試験），渡邊眞（85別課，小児科）

III. そのほか目についた人たち

天野星夫（79年奨進医会同盟簿署名者，幹事役），磯部檢三（長崎，ジャーナリスト→試験，日本医専），伊藤隼三（89東医，外科，京大教授），稻田龍吉（89東医，内科，九大→東医教授），井上甲子助（86別課，元巢鴨病院医員），井上通泰（90東医，眼科，柳田國男兄，歌人），氏家信（07東医，精神科，元巢鴨病院医員，東京医大教授，歌人），遠藤大太郎（京都，学校衛生），小川劍三

郎(88 東医, 眼科, 岡大教授, 眼科史), 河内全節(84 従来開業, 会初期に報告何回か), 今裕(00 第2 高等, 病理学, 北大教授), 佐伯理一郎(81 熊本, ペンシルヴァニア大学医学部, 産婦人科, 看護教育), 新宮涼園(東京府医術開業試験委員, 慶應義塾医学校教頭, 父は新宮涼庭の義子), 須田卓爾(89 第2 高等, 眼科, 東京医専教授), 關場不二彦(89 東医, 外科, 札幌病院, 日本医史学会創立発起人), 千日亮〔後記〕, 高松凌雲, 血脇守之助, 陳垣(清国, 医学から転じて歴史学, のち北京師範大学学長, 中国科学院歴史研究所第二所所長), 寺田織尾(90 東医, 外科), 中井常次郎(84 履歴, 73 東校中退, 佐々木東洋門, 東京府癲狂院長, 大隈外相の負傷を治療), 長尾折三(90 第1 高等, 外科, 『噫医弊』), 長與又郎(09 東医, 病理, 東医教授→東帝大総長), 林曄^{あきら}(92 東医, 外科・整形, 林家), 福土政一(06 東医, 病理, 日医教授, 刺青収集), 二木謙三(01 東医, 駒込院長, 伝研, 健康法), 南大曹(04 東医, 胃腸病), 三宅鑛一(01 東医, 精神科, 東医教授, 三宅秀の子), 三宅良碩(ボードイン門下, 眼科, 三宅良一の父), 茂木藏之助(05 東医, 外科, 慶應教授), 森田正馬^{まさたけ}(02 東医, 精神科, 元巢鴨病院医員, 慈恵教授, 森田療法), 山本宗一(94 第3 高等, 精神科, 元巢鴨病院医員, 大阪精神病院)

ところで, 1897 年会友録で広島会の会友は40 名いたが, この収納簿ではそれらしい名はすくない(1912 年会員名簿では24 名), 芸備医学会が1897 年に第1 回総会をひらいており, 芸備の関係者のかなり多くはそちらにうつったのだろう。

さて, 千日亮は, 日本神経学会第8 回総会(1909 年)に4 名の幹事の一人に呉主幹から指名された人で, 日本神経学会事務所と会規則にしろされた所は, 千日の住所であった。そののち総会での庶務報告は千日がおこない, 1908-1916 年の『神経学雑誌』発行人も千日であった。ところが, 1916 年に千日は, トラホーム予防協会の事務多忙のため神経学会の事務を辞する, という広告を『神経学雑誌』にだしていた。わたしはかれの住所を手がかりに医師名簿にかれの名をさがしたが, みつけられなかった。そこで, 『日本精神神経学会百年史』では, かれは医師ではなく, 医学関係の編

集事務を専門にする人だったろう, とかいた³⁾。このときは, かれが奨進医会の会員であって, 「日本医史学会の歩み」にかれの名をあげていたことをすっかりわすれていた。1897 年会友録には“因幡国鳥取衛成病院 千日亮”とあったのである。『芸備医事』第109 号(1905 年)に「脳梅毒の三例」をかいたときの所属は東京衛成病院となっている。かれは軍医であった。『實用新治療書』(1889 年)(この序文に富士川游は“余ハ千日君ト同郷”とかいている), 『輓近育児法』(安井洋との共著, 1909 年)(ここでの千日の肩書は陸軍3 等軍医正)の著があることを, 樋口輝雄氏からご教示いただいた。また森林太郎日記には, 1908 年5 月1 日“千日亮を学習院に薦めんがために, 大西を石黒男の許に遺す。”⁴⁾, 1914 年12 月16 日“千日亮, 堤友久来訪す。予防目疾の事を言へるなり。”⁵⁾とある(1914 当時トラホーム予防協会にもかかわっていたのだろう)。

閑話休題。1909 年正会員22 名中に帝国大学医科大学→東京帝国大学医科大学本科卒業の人が12 名, 別課卒業の人が6 名いた。3 回から4 回名のである64 名中には, 同上本科卒業が14 名, 別課卒業が10 名いた。ちなみに別課は, 医師速成のためにドイツ語によらずに日本語で医学教育をおこなうもので, 修学年限は3 年→3 年半であった。はじめ医学通学生教場とよばれた別課医学は, 1875 年に開設されて, 1884 年かぎり募集が中止され, 最後の卒業生は1888 年にでた⁶⁾。

そのほかに, 東京府癲狂院→東京府巢鴨病院の関係者が, 3 回以上名のでている人のなかに4 名, 目についた人のなかに6 名いる(後者は, わたしが精神科医療史を自分の主題としているから, 当然といえば当然のことだが, やはり全体のなかではおおめといえよう)。また, 正会員中に東京帝国大学教授(のちに教授になった人もふくめて)が6 名に達する。

さて, ここにあげた名をみて読者はどうおもわれるだろうか。奨進医会は, 単に医学史, 医療倫理を研鑽しようと富士川, 呉を中心にあつまった同好会にはとどまらぬものであった。当時の医学会の上層・中堅のかなりの人をあつめた強力な医学・医療文化団体であったとみるべきであろう。

また帝国大学医科大学別課の卒業生が意外におおいことも注目すべきである。名をかたられぬ人がおおい別課の、日本の医学史、医学・医療文化史における意義にも、あらためて照明をあてるべきであろう。

本稿の要旨は、2007年1月27日日本医史学会例会、および同年4月7日第108回日本医史学会総会（大阪、田中祐尾会長）で発表した。本稿の作製にあたっては、石原力、郭秀梅、樋口輝雄、町泉寿郎の諸氏にご教示いただいたことに深謝する。

文 献

- 1) 岡田靖雄「日本医史学会の歩み」日本医史学会総会百回記念誌編集委員会編『日本医史学会総会百回記念誌』31-136, 日本医史学会, 東京, 2000.
- 2) 同上64.
- 3) 岡田靖雄「日本神経学会, 日本精神神経学会と日本の神経学」日本精神神経学会百年史編集委員会編『日本精神神経学会百年史』616, 日本精神神経学会, 東京, 2003.
- 4) 森林太郎「明治四十一年日記」『鷗外全集』第35巻402, 岩波書店, 東京, 1975.
- 5) 森林太郎「大正三年日記」『鷗外全集』第35巻644, 岩波書店, 東京, 1975.
- 6) 東京大学医学部百年史編集委員会編『東京大学医学部百年史』158-162, 東京大学出版会, 東京, 1967.